



^ 5
6610
3



入5
6610
3



87847

<2000-395>

蒼虬菴發句集

秋之部

おし尾をきりゆくと暮るは店のか
吸かしの乃平はむさぐら秋
山の井は花は咲けりけしの縁
人比より田中よもあてはきりけり

もやうくそ降しそそ秋の味
何れうと市子実りやらそ秋の味
そのそぬ柱年ようそ今秋の味
くそいそ起そ所そ秋の味
江の味うけそ秋の味
そ秋の味よそ秋の味
そ秋の味よそ秋の味
けそ秋の味よそ秋の味

子鹿

うらふそ起そ秋の味
そ秋の味よそ秋の味
一二寸清水もあそ秋の味
そ秋の味よそ秋の味
秋の味よそ秋の味
あだのそ秋の味
たの秋の味よそ秋の味

この秋もあつて起て口をき
訪あふたも火あつたの
下
を所様やよこ市々
此摺火あ
秋の洗ふてまゝ竹
第

この秋の紅葉の江よ

往吉の秋のせえ出る小舟
乳
稲妻子望の水汲
伏あつた
お
いなるまやふり
秋の身
のた
り

草分けを子稲妻の
小舟
り
お
いなるまや
茶は
ま
青の
を
秋の
市
中
や
初
世
舞
の
ふ
り
川
の
り
あ
ら
る
り
や
境
を
ま
ま
秋
の
青
の
水
世
舞
を
ま
ま
ふ
り
の
瀬
田
は
秋
ゆ
き
か
あ
り
校
の
白
い
の
れ
り
秋
の
風
を
ま
ま
下
葉
を
成
子
は
ま

し

三

朝もやそむの世を花の根
桐一葉うらも表も青のやとし
おまの床の高層千並級一葉分
握はともくしてやうより庭すじ
梳一葉持て出さや花也一き
七夕を隣り踏はつく時ちりれ
七夕や出せ海もわか垣根
たむけは花也くや花も海一き

跡思を清くむとさうとたう
健ひ加茂川塔をのちりり
いなるまのけりすくらなれは
七夕や秋千めてたは此きりり
花也のやうより早もの道も花か
か茂川の上千部のははれ川
ふるはれ東はまきり銀河
花もれは花もすものそ花の心

石垣のほめ紙をまけて萩の花
 来こと此千ん千れり萩の花
 咲ともや之萩八日けふ萩や萩
 枝うは青をも居む萩んれ
 ちまやー萩んり萩のさめり
 おまゝあは聖やと紙はれと
 けり人の彩さす萩の垣根
 きの千路日やちかくと萩のも

ちかくと夕日をまけて山の萩
 けりくち萩よおれてある本
 とれちとのあまのまぬ本
 けり中りあまの作る萩
 のちかや、萩より萩のひも
 夕これや又持てまゝ女
 萩をうりくちあをけり
 井戸の石も萩の石も

他人の便りををとりくはるゝ

梅窓の春の行をわたりて

多かりもやまゝも徳も出さ

西の影の照して西のや秋まゝの

くれぬもや秋の影の秋 為

をとりて大を焚き考のやとり部

いづくかきまゝの句

とてをとりまゝのたゞのつゝ寫

そそけたる秋の片に大を井

去のとも神をまじりて波の上

入るゝの月けはあけ金の月

大文字をもちめまゝのと一はむを

火を籠や物をえんのす竹の葉

まゝの春の中をまじりて踊りな

月をとりて持てあつてもゝは

土橋をとりて取除く言はれ

の
葉

巾一結也併へやも表むき
刺一積り添けり佐母のたぬな
吉はらるゝの之る山横一越て
よゝつ結る異を履や日笠山
おゝおのち海さよ雪くたぬさ
小夜礎そあゝゆゝ山さゝり
雪之沢へあゆむる

鏡念年とあゝてや一小夜礎
人仮つゝと降ま一山の雪
子稲のまやむく起れゝ遠歩り
又せれ雪や氷おてゆゝ床月先
晴てりゝや併の稲乃こ
大支け影塵もるゝ稲のあ
れくゝるの危上をれきて秋の雪
をまゝたの雪と舞はる秋の雪
日くど一とこの山もあやまら

虫いりく 州のうらを字取ぶ
隣 孔と取とる 雲らう 秋のうら
く 州のうらとる 雲らう 秋のうら
病 携り 痛の 育くく 秋のうら
去 月の 灯の 秋のうら 陽の 秋のうら
去 月の 灯の 秋のうら 陽の 秋のうら
去 月の 灯の 秋のうら 陽の 秋のうら
去 月の 灯の 秋のうら 陽の 秋のうら
去 月の 灯の 秋のうら 陽の 秋のうら

竹 見れば 竹の中より 秋のうら
境 遠く 人の 動かし 物よれを
秋の せ 秋の せ 山乃 秋
秋の せ 秋の せ 山乃 秋
秋の せ 秋の せ 山乃 秋
秋の せ 秋の せ 山乃 秋
秋の せ 秋の せ 山乃 秋
秋の せ 秋の せ 山乃 秋
秋の せ 秋の せ 山乃 秋

竹のこしと千浮を吹く秋の凡
 奥まけりて雲村恒根をめぐり
 熟の流ぐまりの新市の口はくま
 糸まきしらの村松村とる
 東店千いしてひて

熟の流ぐまりの新市の口はくま
 そのまけりて雲村恒根をめぐり
 熟の流ぐまりの新市の口はくま
 糸まきしらの村松村とる

一日のおくはきして秋のそ
 石山千公のちりやゆまのくも
 所れくも横をうきる東乃山
 夕陽千引りて居れふあとの
 せぬらゆらゆらくくんえそ存の後
 草生千入とよそえたる月乃雁
 糸まきしらの村松村とる
 海舟の筆墨の太さ新巻を

秋

秋の空よりわたる乳白く天は弱
きらんあちとちをさるる世の鴨
これの鴨をのぼる世も持た
世もよれ秋よりつれを返り多

法

草中も木もこれ人形よあ火の束
三日月々これあつき一ひのさき

梅木屋の本の名もこれ三日の月
掬ひのぬれさやこれ三日の月
一とせの色もこれ三日の月
松り替はゆき秋を替り秋の月
あつきのあつきを危めて梅の月
えんてこれこれこれこれこれの月
梅も木もこれこれこれこれこれの月
傘も木もこれこれこれこれこれの月

新山を渡り出ぬけて秋の月
とのけりなほさうなほどりふの月
雪の敷は保のまゝとてさきさき
ふり出せ

竹一葉ふくまはつるやけふの月
月々宵明りけりたはつるけり
とさへ風の吹きかへり
名月や摺火と厚き松のけり

名月や一東原山平住ころ
明月結けりぬるや人の裾
名もくやけりけりとのまゝ
年々の名月ありたはぬけり
名月や梅の立枝もえり
名月の傍り文とて水とて
名月や竹煙るや谷の家
名もくや物けりけり地持のまゝ

炭孔んと通つてやうすも月見が
さむじろのちりも鎖おく月見が
所はつのおまふ地月見が
出ーほんそん流つく月見が
流残る土揚の人の月見が
栄器ーたあそ知の流きとを
松葉かく胃も月のゆーれ
形つー平首骨たー月の雪

押ぬくひくーけり月のくも
降ーけはきすうま見えそぬの月
人へ通そそ流る雪出さう山の月
葉かーゆをたのそそ流るの月
思案ーと所へ入りぬ月のつ
堅田まえ

月伐々をもく人おまのけり平知く
八月十五おま首も平床儿

○

三十三

をすすむ

月のあちちとく 仙平 障のれよ
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち

さうのあちちとく 仙平 障のれよ
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち
十とつ月のあちちをのせとつ原花舟
いさよのあちちのあちちのあちち

字の戸付外は心は秋の夜
眼は前より暮らさるる秋の雨
あはれまきすらの心はゆきのふ
葉の目之ゆは獄鳥の出る啼
手は海に暮らさるる秋の心
夕のけとちりや一不葉れま
任吉の松の暮らさるる秋の菊
きくのあやすくはるる秋の星

少の年の秋の心は秋の夜
垣あはれまきすらの秋の心
畑の目之ゆは獄鳥の出る啼
手は海に暮らさるる秋の心
夕のけとちりや一不葉れま
任吉の松の暮らさるる秋の菊
きくのあやすくはるる秋の星

わらわの地のみ水より
やうらうらくまをりて

さほくく牛をりく葡萄の白はく
瑞穂畑もはくくはくまの花
姫川の原きく所ををりて
立山平かきいをり秋の空

伊勢路記行

そらちの橋をすす石部山

陰蒼ゆきくまあはくはく
を串のくまあはくまあはく
あはれは

く一帯も古きゆむ筑紫山
標木の跡をみる此神社あり
もあはくまあはくまあはく

只大乳系標の木のみゆはれは
標木やまあはくまあはく

花のりまゝくちあつをほひさるる
をいふ悔ける年あつをいふ
よき官をねむりて

あつふの公人平借もむ神詠山
うたひのほもをいぬ二見の秋事人
おあつこと年一電ももはつおの山
白く休のものと尺あつ一庚申
の交はつづつの子屋をむすひ

とみ平十境をいつち定めつ
あつをさつづつ拾新尾の石
い道を休するあつを布意北
あつ平と秋は又月たなゆあつ
そをいれつづつ秋色拍よつち
志はつてあつあつあつあつ
秋の節あつ平と松平あつち
甲午の秋あつ平とあつち

人くみんおろきて

秋日さらけとまて体りと海に

等々秋ハッ掃きて

花の時来て人あきむ杜若

くまら明々秋も等けり之上山

空の静の山にて

くまら明々旅人あきり秋の聲

山はくまら明々此のゆきのそら

家だてるりむらゝ人の秋の聲

一市とを日のおきて秋の聲

庭をけい掃布と井あびの聲

あ破りて

ゆきりと人あきれす不彼の秋

呉山の宝晋をを居侍りて

先年越後尺杖をりてこの声と

い徳後年あきれすあきりて水

念ふを梅の此を何をもへた
むやとやそと尚も此の春を
くれくつと梅年暮置打行
たふいと暮あり梅あれは
るぬく梅あれは暮人もあし
と今宵討ひ暮るんくも對て
物くくそ梅むつよりと鹿の
甲申の秋九月徳学院へ

御幸ありるを加茂河の舟より
とら梅も梅も

御幸海へ松風秋をくすえ
一ちあつちあつち出さう后の月
かたもぬ枝の末まやのあれ也
上へ入るなりと晴ぬ后乃りき
ふし年暮る梅も此谷のももあは
畑くらおりの少もの紅葉りか

こゝ海を木影屋のこゝの紅葉

真西より

りなむる皆々くれぬぬの中の際

ゆく秋や雀の歩り字乃中

〇

丁

